「まなび」に参加しての成果と課題
都立北多摩高等学校　教諭　平井孝夫

１．成果
①文科省、都教育委員会と教育現場に意識の違いはないか
　文科省のパンフレット「ゆとりある６年(中高一貫教育の推進)」では、中高一貫教育では、**ｉ）ゆとりのある学校生活　ii）継続性のある教育指導　iii）伸ばせる個性・才能　iv）豊かな人間性の育成**　の４つのキーワードで意義・利点があるとし、どのような特色を持つ教育内容にするかは都道府県等が判断することになると述べている。
　都教育委員会は、中高一貫教育校の整備に関する検討委員会　報告書〈将来の日本を担う人材の育成を目指した東京発の新たな教育の展開に向けて〉の中で、中高一貫教育の意義は、**ｉ）高校受験の影響を受けることなく、ゆとりある安定的な学校生活を送ることができること　ii）６年間を見通して、計画的・継続的な学習指導、進路指導・生活指導等を展開することができること　iii）異年齢集団による活動を通して、社会性や人間性を育てる教育の一層の充実を図ることができること**　の３点に要約している。
　これに対し、我々の現場ではどのような意識で、中高一貫教育を進めようとしているのか。
　私立（桐蔭学園）での研究協議会で、中高一貫教育が文科省や都教育委員会の意義とはかけ離れたところで行われていることを私は感じた。公立（筑波大付属駒場高）の授業公開に参加できなかったが、資料を見たところ短期視点ではなく骨太な教育がなされていることが推察される。我々公立である都の教員は都立学校でどのような教育を作り上げるべきか、時間をかけて現場で検討すべきであることをあらためて感じた。

②前期生徒（中学校）と後期生徒（高校）の発達段階の違いや学習内容について
　中学校や私立（桐蔭学園）での研究協議会で実感したことであるが、中学生の精神的発達段階や学習内容を高校教員である私がほとんど分かっていないこと、従って、学習内容を検討するときは、経験豊富な中学校の教員と情報交換をする必要があることを強く感じた。更に、上級学校（大学や専門学校）の教員がどのようなことを高校に要求しているか検討する必要があると思った。

２．今後の課題
①基本的には、教科「数学」の６年間の学習内容をどのように計画的に配置するか
　（数学の教材配置や学習内容の順番を検討する際、一括して検討することは難しいと思われるので、例えば代数分野と幾何分野に分けて検討する）
②ゆとりで生じた時間で扱う発展的学習の内容はどのような教材が適当か、教材研究をする
③数学教育と「情報」や「総合的な学習の時間」との関連を研究する